

歴史点描 17 坂上荒神社

県道27号(太子・御津線)に面する宮内交差点から北へ向かうと、まもなく道路西側の坂上の屋台蔵が人目を惹く。巨体が入り出すのに都合の良い立地は、魚吹八幡神社の祭礼日前後、公衆の熱い眼差しが注がれ晴れの効果も上々。

南の細い村道を西へ200メートルほど、お目当ての荒神社境内にたどり着くと、大樹の木陰に鎮守社の素朴な佇まいが目に入る。北からの水路は宮脇をかすめ東へ、^{ふたながれ}神殿うしろを西へ流れる二流の小川は、水利を重視した宮の聖域、ひいては村落の成り立ちが感じ取れる。

この辺り一帯は^{こあざ}小字地名を「町田」といい、中世以降に行われた開拓地名で、一町の田(3000坪)を開拓したという意味をもつ。村人はこの場を起点として開墾を進め、定住が始まったのだろう。豊穰の地に村人が増えると「坂上村」と「坂上出屋敷」とに分かれ、坂上出屋敷はその出作村で、寛永元年(1624)に分かれたと『姫路市町名字考』橋本政次著は記す。近隣、垣内に「壺丁春」地名が残り、春は^{はる}「墾」の当て字で中世に開墾が進んだ^{いわれ}謂れを物語り、両村の開拓歴史観が広がる。

やがてもろもろの災厄から身を守るために荒ぶる神、素盞男命を廣峯神社から勧請し荒神社と唱えた。豊作を願う農耕神の御利益が先行したのだろう。

聞き取りによれば、相撲場もむかしはあったそうで、8月15日に行われる^{こうじんまつり}荒神祭も少人数だが盆踊りも続いているそうだ。

網干歴史講座

田中早春



県道に面する屋台蔵



秋祭り新調された注連縄